

## ●朝鮮戦争の思い出

飯田正能 ②5-6

☆今年に入って北朝鮮は、核実験や弾道ミサイルの発射実験を繰り返している。この7月9日と8月24日には、潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM—Submarine Launched Ballistic Missile・海中の潜水艦から発射される弾道ミサイル。搜索が難しい海中から発射可能なため、探知されにくい。米国、ロシア、中国などが保有している) の発射実験を重ね、24日には、北東部沿岸の新浦沖から約500 km飛行した。実戦配備されれば、日米韓3カ国の安全保障上重大な脅威となる。米韓合同演習に反対する示威行動ともとれるが、国連安全保障理事会が26日に発表した北朝鮮のミサイル発射を巡る非難声明に対し、米国による在韓米軍への最新鋭ミサイル防衛システム「最終段階高高度地域防衛 (THAAD)」配備決定に反対する意図から検討の延長を要請していた中国も、度重なる北朝鮮の挑発行為を黙認すれば、国際社会の批判が強まり、9月4日に始まる中国・杭州での主要20カ国・地域 (G20) 首脳会議への影響を考慮してか、非難声明に同意した。

★昨今の朝鮮半島情勢から、筆者はかの

朝鮮戦争勃発当時のことを思い出すことしきりである。昭和25年6月25日午前4時、「ポツン（暴風）」の暗号命令と同時に、満を持して北緯38度線に展開していた北朝鮮軍7個師団は一斉に南進を開始した。兵力約11万1千人、火炮千60門、戦車約130台、自走砲28台……。T34戦車を始め、最新鋭のソ連製火炮等を装備した精鋭部隊であった。しかも将校の多くはソ連軍や中国軍出身者で、部隊の一部も元ソ連軍や中国軍の朝鮮人部隊であった、圧倒的な優勢を保持していた。6月28日には、早くも首都ソウルを陥れ、破竹の勢いで南進した。対する韓国軍は8個師団約9万8千人、内38度線に配備されていた5個師団には定数のM1小銃やカービン銃が支給されていたが、後方の3個師団には旧日本軍の九九式小銃しか支給されず、兵器の15%、車輛の35%が老朽化し、弾薬、燃料の備蓄は戦時必要量の1〜2日分しかないという有様で、士気、統率も低調、戦力の不均衡は明らかであった。また、米国の軍事援助も軍事顧問団2人が駐留するのみであった。

かう途中、掃海艇に乗船したという木浦（モックポ）の海水浴、大邱の北、兩軍攻防の要衝倭館付近を流れる清流、琴湖江（砂金が採れた）での水泳や魚釣り、東の要衝、旧新羅の古都、慶州での遺跡跡の見学、大邱郊外に親戚が経営していた林檎園に長期滞在して朝鮮の子供たちと一緒に遊んだ思い出など今も鮮明に覚えている。

★朝鮮戦争勃発当時、筆者は福岡市箱崎の旧制九州大学法学部政治学科に学んでいた。米軍の板付空軍基地に近く、離着陸コースの真下にあるので、その騒音は激しかったし、危険度が高かった。戦争勃発後間もなく、被弾した米軍戦闘機が工学部講堂の屋上に墜落した（乗員はパラシュートで海岸に降下した）事故があり、機体処理のため駆け付けた米軍との間にいざこざがあった。米軍司令部に学生デモをかけて発砲騒ぎになったこともあった。

★朝鮮戦争勃発当時、筆者は福岡市箱崎の旧制九州大学法学部政治学科に学んでいた。米軍の板付空軍基地に近く、離着陸コースの真下にあるので、その騒音は激しかったし、危険度が高かった。戦争勃発後間もなく、被弾した米軍戦闘機が工学部講堂の屋上に墜落した（乗員はパラシュートで海岸に降下した）事故があり、機体処理のため駆け付けた米軍との間にいざこざがあった。米軍司令部に学生デモをかけて発砲騒ぎになったこともあった。

☆当時、九大には、北朝鮮系の学生も複数学んでいたようである。大教室での講義の合間などに教壇が上がって北朝鮮軍（解放軍と称していた）の南進状況を具に報告する学生もいた。特にソ連製のT34戦車には、米軍供与のバズーカ砲も対戦車砲も備わらず、韓国軍はT34戦車が出現すると、「チョンチャ・ガ・ワツタ・トマンガラ」（戦車が来たぞ、逃げろ）と叫んで四散する始末であった。また、韓国軍は各河川の橋梁を爆破して南

進を阻止しようとしているが、どんなに川幅があっても北朝鮮軍はゴムボートの橋梁を立ち所に設置して渡河するので、南進を食い止めることは不可能である。8月15日の光復節には朝鮮半島全土を解放するであろう、と得意げに演説していた。それに同調して拍手を送る日本人学生もいた。北朝鮮の金日成首相は、解放軍の最初の一突きで、韓国内のゲリラや反体制派の民衆が一斉に蜂起し、人民の力が勝利すると豪語していたが、全くの期待外れであった。その原因の主たるものは、北朝鮮軍の残虐行為にある。戦禍を逃れて日本に避難し、そのまま定住した韓国人の知人に聞いたところでは、一村丸焼け、略奪、皆殺しは屡々行われ、本人も父親が官吏であったため、一族皆殺しにあったとのことであった。当時、筆者も玄界灘に面した海岸近くに住んでいたが、小さな漁船に乗って着の身着のまま避難してくる韓国人が後を絶たず、その対応に追われた経験がある。

☆朝鮮戦争当時、国連軍司令部の置かれた慶尚北道の道都、大邱府は筆者の生まれ故郷である。昭和3年1月から同12年12月末、小学校4年の2学期までそこで育った。米軍が北朝鮮軍と死闘を演じた洛東江での舟遊びや李承晩大統領が列車でソウルを脱出し、大田を経て釜山へ向

★米軍の対応は早かった。トルーマン大統領は6月26日、韓国支援のための米海空軍の行動を決定し、朝鮮半島における米軍事行動の指揮権をマッカーサー元帥に与えた。ストラトメイヤー中将が指揮する米極東空軍は、日本、沖縄、フィリピン各基地に配置されていたB26・29爆撃機、F80・82戦闘機等有力戦爆機を九州地区、主として板付飛行場に集結

させ、28日朝から北朝鮮軍攻撃に出動させた。逆に国籍不明機が北九州上空に侵入し、空襲警報が鳴り響いた。北朝鮮軍の飛行機は全てソ連製であり、操縦士もほとんどソ連兵であった。在日米軍は早速、大量の武器弾薬を輸送船で釜山に急送したが、その補給基地の一つである香椎キャンプは、旧九州飛行機の工場と飛行場の跡地で、筆者が終戦直後、その建設に携わったところであった。一方、6月26日には国連安保理事会緊急会議が開かれ、北朝鮮軍の撤退を求める決議案が可決され、7月17日には、大邱の第8軍司令部に国連旗が掲揚され、形式的には史上初の国際機構軍が成立した。

☆首都ソウル陥落の翌29日、水原飛行場に飛び、前線を視察したマッカーサー元帥の要請により米地上部隊を投入することに決定したのは7月1日、小倉に司令部を置く第24師団の1個連隊を急派することになり、先ず熊本に駐屯する第21連隊第1大隊を板付飛行場から釜山飛行場へ輸送し、2日、大田へ前進させた。しかし、縮戦における米軍は惨敗続きで忽ち洛東江の防衛線にまで後退せざるを得なかった。第24師団長はディーン少将で、大田攻防戦に奮闘し勇猛果敢振りを発揮したが、7月20日、大田陥落の際、山中を彷徨い、1カ月間の逃避行の後、北朝鮮軍の捕虜となり、3年間の捕虜生活を送った。第24師団に次いで大阪に司

活を送った。第24師団に次いで大阪に司

活を送った。第24師団に次いで大阪に司

活を送った。第24師団に次いで大阪に司

活を送った。第24師団に次いで大阪に司

令部を置いていた第25師団を派兵することになり、第1陣の1個連隊は7月10日、釜山に上陸した。しかし、第2陣の1個連隊は黒人部隊で、駐屯地の岐阜を軍用列車で出発し、7月10日未明、小倉の城野キャンプに到着し、空輸を待っていた。その黒人兵の一部が暑さに耐えかねて車外に出、キャンプを脱走して付近の酒屋に押し入り、酒を奪ったりして騒動を起こした。同キャンプは旧陸軍の補給廠跡であり、後に米軍戦死者の遺体処理所となった。

以後、米軍は逐次増派され、釜山橋頭堡を死守すると共に、9月15日の仁川逆上陸作戦の成功によって攻勢に転じ、38度線を奪回するまで、北九州における戦争の危機感と緊張は続いた。

## 六幼会